The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	交錯する役割意識とアイデンティテイ ： 子どもによるインタビューの中断と再開を事例に
Author(s)	秦, かおり
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2015, 2014, p. 11-20
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/54365
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

交錯する役割意識とアイデンティティ：

子どもによるインタビューの中断と再開を事例に[1]

秦　かおり

1．はじめに

１人の人間が複数のアイデンティティを持ち、それをその場その時の状況に応じて様々に（意識的にまたは無意識的に）表出させていることは現在のアイデンティティ論においては議論を待たない。例えば、出身地域、民族、国家の一員であることなどは、アイデンティティとしてその人物に深く根ざすものであろう[2]。また、ある特定の相対的な関係性の中で役割意識を持ち、それを自らのアイデンティティとして確立していくものとしては、（自分の子どもに対しては）母であること、（自分の親に対しては）子どもであること、（社会的立場としては）労働者であること、（夫に対しては）妻であること、（孫に対しては）祖母であることなどがその例として挙げられるだろう。

しかし私たちは、日頃の生活の中で常に自分のアイデンティティを感じとって生きている訳ではなく、何かのきっかけがあって意識に上るものである。例えばオリンピックやワールドカップなどの国別対抗スポーツイベントで他国に自国の選手が勝った時、日頃はたいして知りもしない選手でも誇らしげに思えたりすることは、日々の暮らしの中では潜在化している国民としてのアイデンティティ、同族意識が顕在化したものと言えるし、政治レベルで言えば、仮想敵の設定により国民意識の高揚を図る戦略は歴史的にも多く見られてきた。もう少し日常のレベルで言えば、家に帰れば母として振る舞っていても、労働者として会社で働いている時に四六時中、今うちの子はどうしているだろうと思っていては仕事が進まない。人はそれぞれの場に応じた役割を全うするために、それに応じたアイデンティティを意識的にあるいは無意識的に表出させ、使い分けているのだ。

そうだとすれば、人がそれぞれの場に応じた役割を保とうとしている時に、それを阻害する「事件」が起こったらどうなるのだろうか。人はどのように、不用意に均衡が保てなくなったその場を収束して元に戻そうとするのだろうか。この疑問を解くことが本稿の目的である。具体的には、インタビューの場において、インタビューの内容とは関係がない事案が起こり、母親としての役割を果たさなければならなくなってインタビューが中断してしまった後に、それを誰がどのように修復し元に戻すのか（あるいは戻さないか）を、役割意識とアイデンティティの側面からミクロ分析を試みる。特に、談話標識、ベビー・トーク、オーバーリアクションによる子ども達への満足感の付与と促し、さらにスモール・ストーリーを中心に分析する。

---

[1]本研究は，科学研究費（挑戦的萌芽研究 22653060，研究代表者　秦かおり）の助成を受けて行われた研究成果の一部である。なお、執筆過程で有益なコメントを多数下さった片岡邦好氏に謝意を示したい。

[2] しかしながら、これらのアイデンティティも個人の感性などによって深度も有無も異なる。従って、絶対的に「生まれながらに」持っているアイデンティティとは言えない。

２．先行研究

２．１．母親としての役割意識

母としての役割意識については、社会学、心理学、語用論を含む言語学、人類学など、様々な分野で分析されてきた。それらの多くは社会規範との関係で論じられ（松木 2013，池本 2003）、また性別役割意識（菅野 1999，尾崎 1998）[3]やジェンダー研究（Suzuki 2007，竹村 2003，中村 2001，愛知淑徳大学ジェンダー・女性学研究所 2009）、フェミニズム運動（Butler 2004）とも深く結びついて論争を巻き起こしてきた。社会学分野における研究としては、井上（2011）が 1990 年代以降の母親規範・母親意識についてまとめており、「依然として根強い近代的母親規範の存在」（井上 2011:103）を先行研究の調査を元に指摘している。しかし、井上（Ibid:112）が「詳細なインタビューにもとづいたミクロな質的研究が不足」し、山根（1999）が日常場面における母子関係を精密に捉える研究の必要性を唱えたように、これらはいずれにせよ、アンケートや実験といった調査手段をとって「母親」という規範やアイデンティティについて論じたものであり、「いつ、どこで、どのように」それが現れるのか、変化するのかなどを比較的日常に近い状態で実証的に研究したものではない。それに対して、社会言語学の分野においては、例えば自称詞の研究などがそれにあたる。日本語では、子どもの前では母は自分を「ママは～」というように母であることを表す自称詞を使用する。それは夫婦間にも波及し、子どもがいない状況下においても夫婦は「パパ」「ママ」と呼び合ったりする。自称詞は状況に応じてシフトが起こり、客観的には類似する状況下であっても「ママ」が「お母さん」や「私」にシフトしたりすることで、その場の相手に示したい自分の役割やアイデンティティ、メッセージを顕在化させていると考えられている。このように社会言語学の分野では、言語使用に焦点をあてつつ、その意味や含意を分析するところに特徴がある。

本稿ではインタビューという場における相互行為に焦点をあて、具体的に言語的現象の意味や含意を社会言語学的視点でミクロ分析をすることで、社会学的に不足していると指摘されるミクロ的実証研究に踏み込んでいく。

２．２．インタビューという場の安定的不均衡性

Goffman（1981）の「参与枠組み（Participation framework）」を土台として場の参与者間の関係性を考える時、インタビューという場はその関係性が堅牢で崩れないものと捉えられる。まず、インタビューの場における「進行の支配者」はインタビュアーである。インタビューはそれが構造化されたものであれ，半構造化されたものであれ、またはアクティブ・インタビュー（Holstein 1995）であれ、まずはインタビュアーが質問をし、インタビュイーの語りを聞き取り、その間に相互行為が挟まりそれが重要な影響を及ぼすとしても、質問項目を聞き出し、聞き終わりや収束を判断するのはインタビュアーである。インタビュイーは話を提供する立場であり、インタビュアーはそれをある程度促したり語りの長短や自分が聞き出したい事項について話してくれるようコントロールする。そのような意味で、インタビューの場において、インタビュアーとインタビュイーの立場はあくまでも安定した不均衡な枠組みの上に成り立っており、根底から立ち位置に違いがあることが前提である。

しかしながら、インタビュアーとインタビュイーの関係性を保つその場に、その他の要素―例

---

[3] 近年では「父親としての役割意識」も議論されている（e.g. 石井 2013）。

えば子ども―が入り込んだ時、その「安定した不均衡」は安定を崩す。インタビュアーとインタビュイーは母親としての役割を果たすために、子どものしたこと、したいことに対し、促し、指導、叱責をするためにインタビューを中断させる必要性に迫られる（秦 2014）。本稿では、そのような中断が発生した場面を取り上げ、そこで母として、そのインタビューの場の提供者として、インタビューの場を主導するものとして、それぞれの役割意識の交錯を、詳細な分析によって明らかにしたい。

３．調査データ及び分析方法

本稿で使用するデータは、2010 年より毎年夏に行っている半構造化インタビュー調査の一部である。調査対象は在英邦人女性と、その女性たちと同じコミュニティに居住する英国人を含む永住権取得者で、在英邦人にはほぼ毎夏、その他の参与者には断続的に行っている[4]。インタビューはそれぞれ約１時間から３時間程度で、2011 年からは１対１もしくは１対２の半構造化インタビューの形を採っている。１年目は予め決められた７つの質問項目を基軸とし、それらをきっかけに自由に話してもらう方法をとり、２年目以降は前年の映像を一緒に観てその時の気持ち、内省、解釈を聴くことに加え、その時々の時事的な問題（東日本大震災の影響、移民政策強化の影響など）を追加し調査を行っている。初年度は 29 名の邦人女性にインタビューを行ったが、その後調査対象地域を絞り込んだこと、引っ越しなどの事情で継続インタビューを続けられなくなるインタビュイーが出たことなどで、2015 年現在、継続しているインタビュイーは日本人 10 名、英国人を含むその他が４名となっている。本稿の分析と考察で用いられる例１は 2012 年に収録された１対１のインタビューで、インタビュイーのまき[5]とかおりは３度目のインタビューとなる。例２は 2011 年に収録された２対１のインタビューで、Harriet と Melissa は親しい友人同士、インタビュアーのかおりとは初対面であった。

これらのデータは会話分析の書き起こし方法の一部にマルチモーダルな分析をするための身体動作などの情報を書き加えた方法で書き起こされた。その中で、データ中に子どもが介入して中断が起こった際、再開までの間に生起した役割意識やアイデンティティ表出の特徴的な例を抜き出し、分析していく。

４．分析と考察

４．１．ベビー・トークによる母親としてのアイデンティティの表出

ベビー・トークとは、motherese（母親語）、caretaker talk（養育者言葉）とも呼ばれ、養育者が子どもに話しかける場合に言葉や音調を変化させることである。具体的には、通常よりも単純な語を用いたり、反復[6]が多い、ピッチが上がるなどの特徴を持つとされる（Ellis 1994、松田 2014）。以下の例では、インタビューの最中に子どもが介入し、インタビュアーがベビー・トークに切り替わっていることがわかる。

---

[4] 本研究の主目的は出産・育児体験にみる日本人女性の規範意識の日英米比較研究であったため、邦人女性を重点的に、その他の女性はその比較として断続的な調査となった。
[5] 本研究に登場する人物は調査者本人を除いて全て仮名である。
[6] 反復には様々な機能があるが、その１つとしてベビー・トークにおける理解を促す機能がある。

図１．例１のインタビュー参与者配置

例１）ベビー・トーク

1.　かおり：　ただ　あの：：丁度わたし：がいた
2.　地域：：のそばで
3.　(かおりの子供が「ケンケン」をしながら登場)
4.　まき　：　((かおりの子供を振り返って見ている))
5.　かおり：　[なあに↑
　[((子供のほうを見る))
6.　りか　：　ん：：ん
7.　まき　：　ガリってしちゃった↑
8.　かおり：　(1.7)あらあ[らどうしたのこれ↑
9.　まき　：　[あー
10.　りか　：　ぶらんこで(.)落ち[た=[7]
11.　まき　：　[落ちちゃったか
12.　かおり：　=落ちたの
13.　りか　：　ほら：：
14.　かおり：　痛かったね：：
15.　よちよちだいじょぶだいじょぶ
16.　りか　：　ん：：ん
17.　まき　：　れなちゃんにさあ：：ばんそこ(.)
18.　ばんそこもらってきたら↑
19.　ね
20.　りか　：　((うなずく))
21.　かおり：　じゃあ行ってきて下さい

以上の例では、かおりが１、２行目でインタビュー上の説明を行っているところで、かおりの子どもが介入して来る。その時かおりは、子どもが何の用事で来たのか認識していないが、５行目

[7] 藤井・金(2014)では文の共同構築、リレー発話、繰り返し、繰り返し同時発話を分析し、相互行為の言語文化比較を行っているが、今回の分析例にもこれらの特徴が見られる。

で既にピッチを上げてベビー・トークに切り替え、養育者（ここでは母）としてのアイデンティティを表出させている。さらに15行目では、「よしよし」の代わりに「よちよち」を用い、「だいじょぶだいじょぶ」と反復を用いる。これらは全て典型的なベビー・トークの特徴であり、インタビュアーとしての振る舞いは完全に中断している。ここでまきが絆創膏をもらって治療をするという案を提示し（17、18行目）、かおりはそれに対して子どもが納得したのを確認した上で、「じゃあ行ってきて下さい（21行目）」と突然敬体に切り替える。ここではピッチも下げることで、ベビー・トークから明確に切り替わり、中断を収束へ促そうとする言語上の変化が見受けられる。

４．２．オーバーリアクションによる満足感の付与と収束への促し

上記の例１は、母親としてのアイデンティティを表出させ、怪我を訴えにきた子どもに一定の同情と安心感を与え、母親以外のインタビュー参与者が解決策を示して、最終的に母親がインタビューの場から子どもを追い出し、インタビューの枠組みに戻そうとしていた。下記の例２は、ベビー・トークこそ起こらないが、これに類似する例である。

図２．例２、３のインタビュー参与者配置

例２はインタビューが始まる前のスモール・トーク部分からの抜粋である。Kaori は別のインタビューのためにロンドンの北地区へ行った話をしている。当時ロンドンではある人種差別的出来事から端を発する、若者による全国的な暴動が勃発し、Kaori は車でその暴動の脇を通りかかった際、それと気付かずお祭りかと勘違いして、家に帰ってテレビをつけたら暴動だった、という内容である。その時、Kaori の正面左側の隣の部屋のドアからドレスアップ[8]した子ども達が顔を覗かせ、Kaori が思わず感嘆の声を上げたところから中断が始まる。

例２）子どもへの満足感の付与と収束への促し

22. Kaori: … turn on [the TV
23. Harriet: [yeah

[8] 子どもの遊びの１つ。安価な価格で男女問わず有名なキャラクターの衣装が売られており、子ども達はそれを着て楽しむ。一種の仮装ごっこで、子どものプレイクラブなどでは専門のコーナーが用意されているなど、イギリスでは一般的な遊びとして普及している。

24. Kaori: and I found it's riot
25. °wow°
26. Melissa: quite scary, [isn't it
27. Harriet: [quite scary=
28. Kaori: [=wow
29. [(ドレスアップしている子どもが部屋を覗き込んでいるのを発見する)
30. Harriet: ((かおりの視線に合わせて子どものほうを振り向き笑顔を見せる))
31. Kaori: @@@
32. Harriet: is that you did
33. Yvonne: no
34. Harriet: ( )
35. Melissa: ladies, come and show us, and go
36. because we need to have a bit of (.) quiet time
37. we're gonna have an interview with a lady
38. Kaori: @@
39. Melissa: come and go ↑
40. ((座ったまま子ども達を覗き込む))
41. Kids: (子ども達が部屋に入って来る)
42. Kaori: ahhh
43. Harriet: that's a lovely dress-up, ehhh
44. Kaori: [wow
45. Melissa: [ohhhhh
46. Harriet: that's gorgeous
47. Melissa: hahahahahaha it's like a model
48. Harriet: >( )<
49. (子ども達は部屋の外に退場)
50. Melissa: and anymore ↑
51. Harriet: is there anymore that ↑
52. Kids: no
53. Harriet: you great >( )<

上記例２では、Kaori が 28 行目で感嘆の声を上げた後の、Melissa と Harriet の子ども達に対する態度が明確に異なる。実は Melissa はこのインタビューの場を提供している家主であり、子ども達の母親でもある。Melissa は、“come and show us and go（35 行目）”と「見せたい」という子どもの気持ちは汲み取り“come and show us”と部屋に入ることは許可しながらも、“and go”を付け加え、インタビューの場を阻害することを最小限に食い止めようとする発言を行う。それに対して、Harriet は“lovely（43 行目）”、“gorgeous（46 行目）”、“great（53 行目）”を大声で連発し、大げさに驚いて見せている。Melissa は“it's like a model（47 行目）”と Harriet に応じてみせるが、その発言は子どもに向けてではなく、目線から考えて Harriet に向けてのものであり、オーバーリアクションを見せながら子ども達に驚いてみせる Harriet に合わせているのみである。ここでは母

親としてあるいは場の提供者としての役割意識を持たざるを得ない Melissa と、子どもを褒め上げる役割に徹した Harriet が、結果として子ども達に満足感を与えた上にインタビューの中断を最小限に抑える結果を生んだと言えるだろう。

４．３．スモール・ストーリーというクッション

上記２つの例では、子どもが介入して来る直前から退場するまでを抜粋した。しかし実は、これらの例ではインタビュー本題に戻る前に、もう１つの段階があった。子どもによる中断があり、子どもが去った後の、インタビュー再開前のつなぎとも言うべきスモール・ストーリー(Bamberg 2004, Bamberg and Georgakopoulou 2008, Georgakopoulou 2011 他)である。秦（2014）が分析しているように、例１ではこの後に家主としての役割意識を持ったまきが怪我の責任に関するスモール・ストーリーを展開する[9]。このような「つなぎ」を必要とする例は他にも数多くあり、上記の例２もその例に漏れない。例３は例２の直後の談話場面で、Kaori が日本の例を説明するスモール・ストーリーの抜粋である。

例３）中断から再開へのスモール・ストーリー

54.	Kaori:	dressing up is very unique play in this country I think
55.	Harriet:	uhh
56.	Kaori:	I have never heard [this kind of …
57.	Melissa:	[it does not happen in Japan
58.	Kaori:	no
59.	Melissa:	yeah, it's funny
60.	Harriet:	oh, OK
61.	Melissa:	it happens, quite lucky
62.	Harriet:	I love dressing up ↑
63.	Kaori:	yeah, dressing up is quite nice and I, my children are really like it
64.	Harriet:	yeah (　　) of the nurseries always have dressing up corner
65.		and one of (　) club even has a…
66.	Melissa:	yeah (.) and shoes=
67.	Harriet:	=dress up=
68.	Melissa:	=quite high shoes
69.	Harriet:	dress up stuff, yeah
70.	Kaori:	in Japan it's normal to have a corner with doll and the dress of the doll (.)
71.		and the (.)
72.		try to take care of the [dolls
73.	Harriet:	[yeah it's home corner we gotta cock corner
74.		and ah…
75.	Melissa:	uhh
76.	Harriet:	yeah, OK, OK

[9] 秦（2014）参照のこと。まきはかおりの子どもの怪我の原因が自宅の庭の手入れの悪さだったのではないかという趣旨のスモール・ストーリーを展開し、その否定を得て中断は収束する。

77.　Kaori:　　>OK, thank you very much [and I::<
78.　　[((インタビューの誓約書を取り出す))

上記の例３では、Kaori が日本ではこのような自分自身がキャラクターに扮装する仮装ごっこよりも、幼児期においては着せ替え人形のほうが盛んだと説明する（70 行目）が、この語りはインタビューという場のストーリー展開上、必ずしも必要不可欠とは考えられない。例えば、例２の 53 行目の後、すぐに “OK, so…”のような談話標識（Schiffrin1987）を入れることによって、すぐにインタビューを再開することも可能に見える。しかし実際のデータを分析すると、インタビュー中にインタビュアーあるいはインタビュイーとしての役割以外の役割意識を担わざるを得ないような事案が発生した場合、次にインタビューを再開する前に、その介入事案についてひとりきりの「談義」があるケースが多いことが分かる。例えば上記の例では、インタビューが実際に再開したのは、Kaori の 77 行目での “and I::”発言の後、インタビューの誓約書を書いてもらおうとするところからである。その前の “thank you very much”の意味は前後の文脈上繋がらないが、この挿入されたスモール・ストーリーを終わらせ本筋に戻すための談話標識としての機能は果たしていると考えられる。言い換えれば、 “thank you very much”よりも適切な談話標識はあったと考えられるが、使用言語が話者の母語ではなかったため、他に思いつかなかった可能性もある。しかしその点を差し引いても、ここで重要なのは発言内容よりも、参与者がインタビューの枠組みに戻るための談話標識として機能する何がしかの発語であり、それが意味上会話にそぐわなかったとしても、参与者間で終結を共有し元のインタビューの場に戻すことだったのである。

この一連の流れ、すなわち、何がしかの理由で中断が始まり、インタビューの参与枠組みから外れた役割意識を担わざるを得ないことが起こった時、それを終結させるには、その原因（この場合は子ども達）が退場した後に「正常な」インタビューの枠組みに戻すためには一頻りの作業があるという流れは、一見無駄話をしているように見えて、実は崩れた枠組みを戻すための重要な行為であるということが分かった。

５．結語

本稿では２つのインタビュー例を元に、インタビューという参与枠組みで与えられる役割意識を超えた事案が発生した時、インタビューの参与者はどのように振る舞い、またその事案をどのように解決に導くのかを検証した。その結果、少なくとも母親としての役割意識やアイデンティティ、その場を提供しているものとしての役割意識は、それがインタビュアーであろうとインタビュイーであろうと、強く働いているということが分かった。このことにより、複数のアイデンティティが役割意識を得た時、その他のアイデンティティを凌駕して前景化し機能する様子を観察することができた。

また、その過程で、インタビューが中断した時には「正常な」インタビューの枠組みに戻すためには多くの場合、スモール・ストーリーや談話標識が必要であり、それらが一連の類似する流れとして存在することが観察された。

母親の役割意識の問題は、社会規範やジェンダーと結びつけられて議論され、このような実際の場面での母としての実際の行動をミクロに観察したものは少ない。しかし世の母親達が四六時中、母であることを全面に押し出して生きている訳ではなく、複数のアイデンティティや役割意識を潜在化させ、時には顕在化させながら生きている。それらがいつ、どのように作用し、また

どのような化学反応を起こすのか、今後もより幅広くミクロ分析を行い詳察していきたい。

トランスクリプト記号

[	オーバーラップ開始部
(.)	マイクロポーズ
(数値)	0.5 秒以上のポーズ
=	続いて聞こえるように発話された箇所
↑	上昇イントネーション
…	言いよどみ
@	笑い
:	長音（音の引き延ばし）
° °	他の箇所よりも小さく聞こえる語
><	他よりも早口の箇所
h	呼気
( )	著者による補完
( )内空白	聞き取り不可能な語
(( ))	ジェスチャーなど身体動作
	その上の行の発語とジェスチャーの始点を合わせている
下線	他の箇所よりも大きく聞こえる語
波線	著者による分析上の強調

参考文献

愛知淑徳大学ジェンダー・女性学研究所（編）(2009). ジェンダーの交差点：横断的研究の試み，東京：彩流社.

Bamberg, Michael (2004). Talk, small stories, and adolescent identities. *Human Development*, 47, 331–53.

Bamberg, Michael and Alexandra Georgakopoulou (2008). Small stories as a new perspective in narrative and identity analysis. *Text and Talk,* 28(3), 377-396.

Butler, Judth (1997). Exitable speech: a politics of the performative, London: Routledge. 竹村和子（訳）(2004) 触発する言葉：言語・権力。行為体，東京：岩波書店.

Ellis, Rod. (1994). *The Second Language Acquisition*, Oxford: Oxford University Press.

藤井洋子・金明姫 (2014). 課題達成過程における相互行為の言語文化研究：日本語・韓国語・英語比較分析，井出祥子・藤井洋子（編）解放的語用論への挑戦：文化・インターアクション・言語，東京：くろしお出版，57-90.

Georgakopoulou, Alexandra (2011). Narrative Analysis. In Ruth Wodak, Barbara Johnstone and Paul Kerswill (eds.) *The SAGE Handbook of Sociolinguistics*. pp.386-411. London: SAGE.

Goffman, Erving (1981). *Forms of Talk*. Pennsylvania: University of Pennsylvania Press.

池本美香 (2003). 失われる子育ての時間：少子化社会脱出への道，東京：勁草書房.

石井クンツ昌子 (2013). 「育メン」現象の社会学：育児・子育て参加への希望を叶えるために. 東京：ミネルヴァ書房.

井上清美 (2011). 母親規範・母親意識の現在：1990 年代以降の社会学的文献レビュー，川口短大

紀要，25：103-114.
秦かおり (2014). 再開のコミュニケーション：子供の介入によるインタビュー中断と再開を事例に，言語文化研究，41: 131-148
Holstein, J. A. and Gubrium, J. F. (1995). *The Active Interview*. London: Sage Publications, 山田富秋他訳 (2004). アクティヴ・インタビュー：相互行為としての社会調査，東京：せりか書房.
片岡邦好 (2008).「身体の詩学」による共創という視点，片岡邦好・池田佳子編，コミュニケーション能力の諸相：変移・共創・身体化，229-257. 東京：ひつじ書房.
片岡邦好・池田佳子 (2014). 談話的「不均衡」はいかに解消されるか，社会言語科学会第 33 回大会発表論文集, 150-153.
松木洋人 (2013). 子育て支援の社会学，東京：新泉社.
松田佳尚 (2014). 対乳児発語(マザリーズ)を処理する親の脳活動と経験変化,同志社大学赤ちゃん学研究センター, 22-33.
中村桃子 (2001). ことばとジェンダー，東京：勁草書房.
尾嶋史章（編）(1998). ジェンダーと階層意識，1995 年 SSM 調査研究会.
Schiffrin, Deborah (1987). *Discourse markers.* Cambridge: Cambridge University Press.
菅野剛 (1999). 性別役割意識の社会的規定因：社会階層とネットワーク，年報人間科学 20(2), 325-340.
Suzuki, Atsuko (2007). *Gender and Career in Japan,* Melbourne: Trans Pacific Press.
竹村和子（編）(2003). “ポスト”フェミニズム，東京：作品社.
山根真理 (1999). 親子関係研究の展開と課題，野々山久也・渡辺秀樹編，家族社会学入門：家族研究の理論と技法，東京：文化書房博文社，226-254.